“コロナ”新時代について考える

札幌医科大学医師会
札幌医科大学名誉教授　石井清一

はじめに

北海道に新型コロナウイルス感染が多発しはじめ、鈴木知事の「不要不急の外出は避けるように」との指示が出て以来、私の自粛生活は半年以上になります。

私はこの機会を利用して、著名な文筆家の作品を熟読することを思い立ちました。福岡伸一氏の『動的平衡１，２』であります。まとまった時間がとれないと、なかなか読み切れない作品です。

福岡氏といえば今､売れっ子の分子生物学者です。文章は短文で構成されており、知的レベルが高く魅力的。一方､私の分子生物学の知識は常識程度です。自粛生活中に十分に時間をかけて熟読することで、福岡氏の足元に少しは近づけたのでは、と思っております。

動的平衡

福岡氏の著作について､私が戸惑いを感じた点は、動的平衡の言葉の意味を私自身が他人に説明できるほど理解していないという不安でした。そこで著書の内容が理解できるまで熟読することにしました。

動的平衡の定義は「それを構成する要素は、絶え間なく消長、交換、変化しているにもかかわらず、全体としては一定のバランス、すなわち恒常性が保たれている系」ということになります。すなわち、バランス＝恒常性を保つために、常に動いていることが大切な条件になります。ところが、恒常性を破壊しようとする力も常時働いており、宇宙の中ではこのエントロピー増大に相反することは不可能であります。人は長い間、エントロピー増大の法則に追いかけられながらの生活を続けてきました。分子レベルでの損傷が少しずつ蓄積されて、やがてエントロピーの増大に追い抜かれてしまいます。個体の死であります。動的平衡とは、個体がまだ自転車操業を続けている状態で出現すると考えております。

私達の生命は
　風や音のようなもの・・・
生れ、ひびき合い
　　消えていく

この詩歌は福岡氏が動的平衡と個体の死に触れたものと思われます。印象に残る言葉です。

福岡伸一氏の“コロナ新時代への提言”

今年の10月６日、NHKはテレビ番組で“コロナ新時代への提言”を企画しました。福岡伸一氏を中心に、歴史学者の藤原辰史氏と、美学者の伊藤亜紗氏とのネット回線で､座談会の形式で行われました。

三人はその前に、最近話題をさらっている宮崎駿氏のSF・ファンタジー作品「風の谷のナウシカ」を鑑賞しました。戦争による科学文明の崩壊後、異形の生態系に覆われた世界を舞台に森をさまよう少女・ナウシカの姿です。

ナウシカは戦いに勝利し、新しい世界の完成が目に見えてきた時、その世界を破壊して去って行きます。その理由について、三名の考えを福岡氏がまとめました。人間の文明社会はAIが求めようとしている方向に作られます。効率、利潤、生産性が追求され過ぎたAIは、人間から生命力を奪い取ってしまいます。生命力を失ったAIがそれを取り戻す方法として、ナウシカは一度AIの全てを破壊してしまうことを考えました。初めからやり直すことによって、生命力のあるAIが復活する可能性を期待したのです。

おわりに

今の社会はコロナ禍で混乱しております。今後われわれは、理想的な免疫・薬物療法の開発を目指して行くことでしょう。大切なことは、知恵を振り絞ってウイルスとの良好な関係を見出して行くことです。もともとウイルスは、遺伝子が引きちぎられて細胞外に遺残したもので､われわれの仲間なのです。

ところで、ナウシカが期待した生命の復活は見られたのでしょうか？　現在、国連では17種目の目標を設け、その達成に向けて国際会議が開かれております。今後は、われわれの意識の改革を伴う価値観の変革も求められて行くことでしょう。われわれの力によって、人生にゆとりと生命力が育つような新たな社会機構が出来上がるのを楽しみにしております。